

# 雑誌『郊外生活』に見る阪神間の大正時代初期における園芸文化

土橋 豊

甲子園短期大学生生活環境学科  
e-mail: y-tsuchi@koshien.ac.jp

## Gardening Culture in the Hanshinkan Area in the Early Taisho Era According to the Journal 'Kogai-Seikatsu'

Yutaka TSUCHIHASHI

*Department of Life Environment, Koshien Junior College*

### Summary

Gardening Culture in the Hanshinkan area which is located between Osaka and Kobe in the early Taisho Era was investigated by analyzing the articles dealing with gardening in the Journal 'Kogai-Seikatsu' (Suburban Life) published by Hanshin Electric Railway Co. Ltd. in the two years 1914 and 1915. Both the ratio of number of pages and number of articles, advertisements, photographs and illustrations dealing with gardening were significantly decreased in Volume 2 No. 1-11 compared with Volume 1 No. 1-12 ( $p < .01$ ). The authors and subjects of the articles were then celebrities, and it was revealed that leading experts in gardening were writing the gardening articles. The findings revealed that in the Hanshinkan area in the Early Taisho Era, rare ornamental plants were widely cultivated in the home gardening scene mainly among the upper class. On the other hand, cultivating vegetables and the fruit trees were common. In addition, gardening culture was found to have been affected by the World War I in the early Taisho Era in the Hanshinkan area.

**Keywords :** Author, fruit trees, ornamental plants, upper social class, vegetable, World War I  
執筆者, 果樹, 観賞植物, 上流階級, 野菜, 第一次世界大戦

### 研究の背景と目的

日本の江戸時代(1603～1868)の園芸文化の現状と発展については、同時代に次々と刊行された古典園芸書などを基に考察が深められ(青木, 1998; 青木, 1999; 平野, 2006; 岩佐, 1985; 小笠原, 1999; 小笠原, 2008; 大場, 1997; 塚本, 1991), 同時代の園芸文化は日本人が育種した植物とその品種は非常に豊富で、関連ある園芸書の数・質ともに優れたことから高いレベルにあった(塚本, 1978)。また、全世界の花卉園芸文化の中で、もっとも特色ある輝かしい一時期(中尾 1986)とされる。江戸時代の幕末期になると、この時代に海外から日本に来たロバート・フォーチュン(フォーチュン, 1969)やハインリッヒ・シュリーマン(シュリーマン, 1998)の著書の記述からも、園芸が庶民の生活の中にも浸透していたことがわかる(土橋, 2013)。

中尾(1986)によると、江戸時代に花開いた園芸文化は明治時代(1868～1912)に入ると衰えはじめ、

築きあげられた特色は忘れられ、その文化の大部分は社会的に埋没したとされる。

大正時代(1912～26)はわずか15年間と短い、1914(大正3)年7月には第一次世界大戦が勃発し、二度にわたる護憲運動(1913, 1924)、大正デモクラシーが起きるなど、激動の時代であった。

一方、阪神電気鉄道(以下、阪神電鉄)は、1905(明治37)年4月に大阪出入橋-神戸三宮の都市間を結ぶ鉄道として開業した。私鉄がいち早く発展したのは京阪神都市圏で、大正時代初期にはすでに鉄道網の骨格が形成されていた(正司, 1996)。「関西型」私鉄の特徴として、都市人口の大規模な郊外分散以前に、主にレジャーなどの消費性交通需要を基盤に成立し、鉄道の敷設とその沿線開発を媒体に郊外化が進んでいった(中西, 1979)とされるように、阪神電気鉄道株式会社(以下、阪神電鉄株式会社)も当初から郊外生活を模索し、郊外生活における新しいライフスタイルを紹介することで乗客の誘致を図ってきた。明治時代末期から大正時代初期の大阪は、商工業の急激な発展、人口増加による市内環境の悪化が大きな問題となっており、電気鉄道の開業と発展は郊外への人々の移住を

2015年2月26日受付。2015年3月26日受理。  
本稿の一部は、人間・植物関係学会2009大会および2010大会で発表した。

促した（永藤，2007）とされる。阪急・阪神の両電鉄会社は、「健康に恵まれた郊外生活」、あるいは「市外居住のすすめ」というキャッチコピーを掲げ、住宅地開発を展開し、その開発戦力のキーワードは、「緑」「郊外」「健康」であったとされる（戸田，2009）。

阪神電鉄株式会社は1908（明治41）年に『市外居住のすすめ』を刊行し、当時の専務取締役の今西林三郎が中心となって医療関係者が講演・論述したものを取りまとめた内容で、郊外生活のメリットを謳っている（戸田，2009）。次いで、1914（大正3）年1月から翌1915（大正4）年11月にかけて月刊雑誌『郊外生活』を発行した（1915年8月休刊）。阪神電鉄株式会社は雑誌『郊外生活』において、郊外生活のライフスタイルの一つとして園芸に注目し、数多くの園芸記事を掲載している。これには、郊外生活の利点の他、花の育て方や栽培など、ガーデニング関連記事を中心に、随筆や評論などが掲載された（戸田，2009）。過密化した大阪、神戸のような大都市では、人々が自家の庭園や太陽の下での園芸趣味をもつことは困難であったが、私鉄沿線の陽光と通風に恵まれた郊外住宅地では、人々はおおむね広大な自家の庭園を所有し、園芸趣味を楽しむことができた（竹村，2004）とされる。

「阪神間」とは、大阪と神戸に挟まれた、六甲山を背景とする地域を示し、新しいライフスタイルが築き上げられた地域であるとされる（戸田，2009）。また、戸田（2009）によると、「阪神間モダニズム」とは、明治後期から大正期を経て、太平洋戦争直前の昭和15年頃までの期間において、阪神間の人々のライフスタイルを形成し、地域の発展に影響を与えてきた、ある一つの文化的傾向としている。私鉄の沿線開発のための新しい郊外生活というライフスタイルの影響下にあった阪神間においては、特徴的な園芸文化が形成されたと考えられるが、阪神間における大正初期の園芸文化について考察した文献は認められない。さらに、雑誌『郊外生活』の園芸関係の記事等を細かく分析した研究事例はない。

そこで、阪神間の大正時代初期における園芸文化を明らかにする目的で、雑誌『郊外生活』を調査した。また、1914（大正3）年7月には第一次世界大戦が勃発し、阪神間の園芸文化にも影響を及ぼすことが考えられることから、園芸関係を掲載する記事内容と記事数等に着目し、第一次世界大戦が日本の園芸文化に及ぼした影響について考察した。

## 材料および方法

### 1. 雑誌『郊外生活』の特徴

調査対象とした雑誌『郊外生活』は、阪神電鉄株式会社の専務取締役であった今西林三郎の主導のもと、当時の運輸課長である太宰政夫の編集により1914（大

正3）年1月から発行され、太宰政夫の退社により終了した（永藤，2007）。1914年には第1巻として第1号から第12号の全12号、1915（大正4）年には第2巻として第1号から第10号の全10号（1915年8月休刊、1915年11月最終号）、計22号が発行されている。毎月15日発行とされ、総頁数は31～73頁で（第1表）、1冊12銭で販売されていた。永藤（2007）は、その内容を健康・衛生、教育、郊外生活、家庭生活、蔬菜・園芸、阪神電車関係、歴史、家庭・家族、娯楽、沿線紳士録、その他の11項目に分類している。挿絵については、大正時代から昭和時代前期に活躍した挿絵画家の名越國三郎が担当していた。

### 2. 調査方法

雑誌『郊外生活』第1巻全12号、第2巻全10号の計22号に掲載された園芸に関する記事、広告、写真および挿絵を抽出し、点数とその頁数（以下、園芸頁数）を調査した。頁数については、0.1頁単位で算出した。また、園芸に関する記事、広告、写真および挿絵（以下、記事等）に掲載された園芸植物（観賞植物、野菜、果樹）の掲載数（以下、掲載記事数）を調査し、食用としない観賞植物と、食用とする野菜と果樹に大別して整理した。記事等で扱われる園芸植物が複数の場合、園芸植物毎に評価し、同一記事等で同一園芸植物が複数回扱われた場合も1と評価した。なお、栽培を前提として掲載したものを対象とし、海外への渡航記（尾崎，1915a,b）に登場する園芸種物は除いた。さらに、主な執筆者や広告主、代表的な園芸家について調査した。

植物名の表記法は原則として『園芸学用語集・作物名編』（園芸学会，2005）に準拠した。学名についてはマバリーの分類体系（Mabberley，2008；大場，2009）に基づき、園芸植物の初出時に記載した。洋ラン類については、多数の野生種および交雑種が掲載されているが、本報告では「洋ラン類」として一括して集計した。

なお、雑誌『郊外生活』の記述内容を引用する際、旧漢字は新漢字に改めて記述した。

### 3. 統計処理

雑誌全22号を第1巻第1～12号と第2巻第1～11号の2群にわけ、園芸に関する記事、広告、写真および挿絵数の合計数および園芸頁率を用いてマン・ホイットニーのU検定（Mann-Whitney U test）を行った。 $p = .05$ を有意水準とした。統計処理には統計ソフトIBM SPSS Statistics 19（IBM社製）を用いた。

## 結果および考察

### 1. 園芸に関する記事、広告、写真および挿絵について

第1表に園芸に関する記事、広告、写真および挿絵

Table 1. Ratio of page, number of magazine articles, advertisements, photographs and illustrations dealing with gardening in the Journal 'Kogai-Seikatsu'.  
第1表. 雑誌「郊外生活」の園芸に関する園芸頁率、記事、広告、写真および挿絵数。

西暦	大正	月	巻	号	総頁数		園芸頁数		園芸頁率		記事数	広告数	写真数	挿絵数	計	
					A	B	A/B × 100 (%)									
1914	3		1	1	62	24.0	38.7	10	2	3	1	16				
				2	64	31.5	49.2	10	4	4	0	18				
				3	63	27.5	43.7	9	3	3	0	15				
				4	69	22.0	31.9	6	3	3	1	13				
				5	73	30.2	41.4	11	4	1	0	16				
				6	53	21.0	39.6	5	4	1	0	10				
				7	55	24.7	44.9	9	1	1	0	11				
				8	55	19.7	35.8	6	3	0	0	9				
				9	47	14.0	29.8	6	3	0	0	9				
				10	47	8.5	18.1	4	0	0	0	4				
				11	47	12.5	26.6	4	4	3	0	11				
				12	31	7.0	22.6	3	0	0	0	3				
1915	4		2	1	71	9.3	13.1	5	0	0	0	5				
				2	47	9.7	20.6	3	2	0	0	5				
				3	47	12.0	25.5	4	0	0	0	4				
				4	55	15.5	28.2	6	2	0	0	8				
				5	39	4.5	11.5	2	2	0	0	4				
				6	39	5.0	12.8	2	0	0	1	3				
				7	39	4.0	10.3	2	0	0	1	3				
				9	39	2.4	6.2	1	1	0	0	2				
				10	39	5.0	12.8	2	1	0	0	3				
				11	39	7.0	17.9	2	5	0	0	7				

の点数と園芸頁数を示した。園芸に関する記事、広告、写真および挿絵の点数の合計（以下、園芸記事合計数）および、総頁数に対する園芸頁数の割合（以下、園芸頁率）が最も高かったのは、第1巻第2号であった。園芸頁率は49.2%にも及び、総頁数の約半分にあたる頁数が園芸に関するものであった。反対に、園芸記事合計数および園芸頁率の割合が最も低かったのは、第2巻第8号で、記事と広告がそれぞれ1点で、園芸頁率はわずか2.4%であった。全体として、第1巻第8号までは園芸関係の記述が多く、以後、減少する傾向が認められた（第1表）。

そこで、雑誌全22号を第1巻第1～12号と第2巻第1～10号の2群にわけ、園芸頁率および園芸に関する記事、広告、写真および挿絵数の合計数を用いてマン・ホイットニーのU検定（Mann-Whitney U test）を行った。その結果、いずれも第1巻第1～12号に比較して第2巻第1～10号において、1%水準で有意に減少することが認められた（第2表）。

雑誌『郊外生活』の発行を主導した今西林三郎は、創刊号である第1巻第1号の巻頭に「郊外生活の巻頭に」と題して（第3表）、刊行の目的を、「阪神電鉄は

雑誌『郊外生活』を発行して趣味研究の機関とし、併せて家庭に高尚なる読物と娯楽とを提供せん為、独り郊外生活に限らず広く薦めて愛読を乞う事としたり」（今西, 1914）と記述している。さらに、第2巻第1号の巻頭にも、「生まれて一年の後に」と題して（第3表）、園芸に関して言及し、「『郊外生活』が家庭園芸の研究機関として、又郊外衛生の唱道者として、大方諸賢の寄頼を受け、常に清新なる慰安を提供し得たるは、顧みて快心に堪へざる所なり」「殊に我阪神間に於て軌近家庭園芸の隆盛を極め、郷土研究の熱亦漸く旺ならんとするは、素より『郊外生活』の鼓吹による…」『『郊外生活』の旗幟は依然として園芸趣味の鼓吹なり…」と記述し、雑誌『郊外生活』における園芸の重要性を述べている。しかしながら、第2巻第1号の発行時点で、既に園芸を扱うことは少なくなっている。そこで、発行の責任者ともいえる今西林三郎の意向と反して園芸を扱うことが少なくなった原因の一つとして、1914年7月に勃発した第一次世界大戦ではないかと仮説を立て、別項で検討することとした。

## 2. 代表的な執筆者および登場人物について

最も多くの記事を掲載していた執筆者は、23記事を執筆していた尾崎哲之助であった（第3表）。尾崎哲之助の著書『大輪アサガオ』によると、大正改元を記念して1912年に「大正園」という種苗店を開業し（尾崎, 1974）、本雑誌においても「大正園園主」の肩書で掲載している。また、第3表には示していないが、大正園の名で記述されている記事（例えば、月毎に園芸作業を解説する「園芸月暦」など）も多数あり、恐らく尾崎哲之助が執筆したものと考えられる。このように雑誌『郊外生活』の園芸関係記事において、尾崎

Table 2. Ratio of page, number of magazine articles, advertisements, photographs and illustrations in the volume 1 and volume 2 dealing with gardening in the Journal 'Kogai-Seikatsu'.  
第2表. 雑誌「郊外生活」の第1巻と第2巻の園芸に関する頁率と掲載数。

	園芸頁率 <sup>2</sup>		掲載数 <sup>3</sup>	
	平均	± 標準誤差	平均	± 標準誤差
第1巻	35.17	± 2.75	11.25	± 1.35
第2巻	15.90	± 2.22	4.40	± 0.60
有意性	**		**	

<sup>2</sup>総頁数に対する園芸関係頁の百分率。

<sup>3</sup>園芸に関する記事数、広告数、写真数、挿絵数の合計。

\*\*はマン・ホイットニーのU検定(Mann-Whitney U test)により1%水準で有意差あり。

Table 3. Main authors and articles about horticulture in the Journal 'Kogai-Seikatsu'.  
第3表. 雑誌『郊外生活』の園芸関係の主要執筆者と記事.

執筆者	所属・肩書き等	巻	号	題 目
尾崎哲之助	大正園	1	1	霜の花守一冬の日記より
		1	2	春時の季節近づけり
		1	3	スイートピーの時代一春四月に大会を開く
		1	4	草花の生い立ちと写真
		1	5	園芸月暦六月
		1	5	カーネーションの事すべて
		1	6	園芸月暦 七月
		1	6	カーネーションの事すべて
		1	7	関西園芸界のダリア時代 (原文ママ)
		1	8	園芸月暦 九月
		1	8	カーネーションの事すべて
		1	9	園芸月暦 十月
安福諒一	錦華園	1	9	カーネーションの事すべて
		1	10	園芸月暦 十一月
		1	11	園芸月暦 十一月 (原文ママ)
		1	12	園芸月暦 一月
		2	1	和蘭球根の話 これから園芸を始める人のために
		2	2	和蘭球根の話 これから園芸を始める人のために
		2	3	和蘭球根の話 これから園芸を始める人のために
		2	4	花道楽の紳士と婦人 阪神間では凡そどんな顔ぶれか
		2	6	園芸月暦 六月中旬より七月中旬まで
		2	9	桑博の庭園
		2	10	布哇に於ける園芸
		安福眞三郎	錦華園	1
1	2			この頃にすべき薔薇の手入れ一移植と挿芽と接木と
1	3			ダリアの事すべて
1	4			花壇の作り方と花の配色一道路のつけ方で費用の節約も出来る
1	5			睡蓮の色と作り方一夏の盛花に珍重される花
1	6			洋蘭の事すべて
1	8			洋蘭の事すべて
1	9			洋蘭の事すべて
1	12			洋蘭の事すべて
2	1			洋蘭の事すべて
2	2			洋蘭の事すべて
安福眞三郎	錦華園			1
		1	3	季節の園芸一シクラメンと桜草の栽培繁殖法
		2	3	ペラゴニウム栽培 (原文ママ)
		2	3	ダリアの新種目
		2	4	チューリップ栽培の要領
		2	5	芍薬の花壇用と切花用途
		2	6	今流行の花色々に就き
		2	7	夏の花 グラジオラス
郊外生活編集部*	阪神電鉄	2	8	園芸月暦
		1	1	私が園芸を初めた動機 (原文ママ)
		1	3	白洲文平氏の野菜園
		1	7	香戸園浜に催されたる第二回関西ダリア大会
中安磯次	武庫郡農業技手	2	1	主人と主婦一家庭訪問、一
		2	6	By Hospitality a beauty garden placed at anyone's disposal.
		2	7	マスキメロン研究会の成績及私見
		2	7	家庭の野菜園より 四十日大根栽培の要領
菊池幽芳	大阪毎日新聞社・小説家	2	9	野菜園芸
		2	9	鳴尾名物 草莓の苗は今から
		2	10	野菜園芸
		1	1	私自身の園藝
北神 貢 (北神瓠村)	関西農園	1	2	園芸を始めてから
		1	5	私方の窓庭
		1	7	記事:ダリア失敗談
		1	8	マスキメロン一高断して乳をかけて庭でたべる
千葉晩香	園芸研究者	1	9	菊花壇の仕立方一肥料の種類と其効用
		1	10	菊花壇の管理と装飾の仕方
		2	4	盛花用睡蓮の栽培
		1	1	自然庵の主人一野菜栽培に熱心な権山伯
千原 清	二葉荘園芸部主任	1	2	スイートピーはこれから蒔つけてもよい
		1	3	溝口伯のダリア栽培
		1	7	記事:千葉式接木法
		1	6	マスキメロンの作り方一八百の苗を枯らした苦き経験より
今西林三郎	阪神電鉄専務取締役	1	8	秋大根
		2	1	草莓
中川源三郎	二葉荘	1	10	あぶら虫
		2	4	電気栽培の話 園芸作物に適応して効益がある
銀豆郎	打出ヒシカ園芸場	2	10	電気栽培の話 電灯を利用して簡易に実行し得る
		1	6	菊池博士の家庭園芸一主人の園芸とご夫人の養蚕
福原會下山人*	講士楽家	1	5	久留米郷園と千住葱
		1	5	牡丹の事すべて
和田庄三郎	和楽園	1	8	鳴尾と鳴尾附近
		1	7	十人むきのダリア

\*記名原稿でなく明らかに編集担当によるもの。  
\*執筆者名は會下山人と記述.

哲之助の役割が重要であった。尾崎哲之助はアサガオ (*Ipomoea nil* (L.) Roth) の育種家として有名で、黄色花のアサガオ‘月宮殿’や黒色花の‘烏羽玉’などを作出している。著書『大輪アサガオ』の著者略歴によると、1910年から園芸生活に入り、1914年には渡米したとなっている(尾崎, 1974)。第2巻第9号の記事「桑博の庭園」(尾崎, 1915a) および第2巻第10号の記事「布哇に於ける園芸」(尾崎, 1915b) の内容は、

1914年から渡米したことによるものであろう。「桑博」とは、パナマ運河開通ならびに太平洋発見400周年を記念してアメリカ合衆国カリフォルニア州サンフランシスコで開催されたサンフランシスコ万国博覧会(1915年2月20日から12月4日)のことである。「布哇」とは、ハワイのことである。尾崎哲之助は、第一次世界大戦中に、アメリカ合衆国カリフォルニア州サンフランシスコとハワイ州を訪れていたことになる。園芸界の貢献が認められ、社団法人園芸文化協会から、1977年に園芸文化賞が授与されている(社団法人園芸文化協会, 2015)。

次いで、記事数が多い執筆者は、種苗店である錦華園の経営者と考えられる安福諒一および安福眞三郎であり、それぞれ11記事、9記事を執筆している(第3表)。なお、大正園と錦華園とは雑誌『郊外生活』における広告主でもあった。『兵庫県の園芸』(兵庫県農会, 1912)には、第4章の「観賞植物」において、「希品優種の輸入培養を計り現今之が営利栽培をなすものは錦華園、天静園を初めとし其他枚挙するに遑あらざるに至りたり」として、錦華園を代表的な種苗店の一つとしてあげている。

中安磯次(1915)は野菜に関する5記事を執筆している(第3表)。雑誌『郊外生活』では所属については記述していないが、和田(2014)によると武庫郡の農業技手である。

また、雑誌『郊外生活』の創刊に重要な役割を果たした執筆者として、菊池幽芳が挙げられ、4記事を執筆している。菊池幽芳の本名は菊池 清で、大阪毎日新聞社において文芸部主任、社会部長、学芸部長、副主幹、取締役を歴任するとともに、小説家でもあった。彼は第1巻第1号の記事「私自身の園藝」において、「雑誌『郊外生活』が産声を上げる迄には、私も大分肝煎をしたのであるから、何か書かねばならぬ責任を以て居る」(菊池, 1914)とし、雑誌『郊外生活』の創刊に深くかか

わったことを述べている。菊池幽芳は関西園芸協会の会長も務めている。挿絵を担当した名越國三郎も大阪毎日新聞社に属し、菊池幽芳の紹介によるものと推測される。

北神 貢 (1914) は北神瓠村の名でも活躍し、併せて4記事を執筆している(第3表)。執筆当時の1914~15年当時の所属は関西農園であるが、和田(2014)によると武庫郡農事試験場の第二代場長として1904(明治37)年に就任し、1912(大正元)年に西宮市の夙川東側に関西農園を開設している。

千葉晩香(1914)も4記事を執筆している(第3表)。彼の著書である『実地応用蔬菜園芸』(千葉晩香・松崎栄三共著)、『菊花培養大観』(千葉晩香著)、『園芸界の新発見』(千葉晩香著)の広告が第1巻の第3号、第4号、第6号、第9号に掲載されており、園芸に関する専門家であったことがうかがえる。

千原 清(1914)は二楽荘園芸部主任で、4記事を執筆している(第3表)。二楽荘は、1909(明治42)年に、西本願寺の第22世宗主であり、大谷探検隊の総帥として名高い大谷光瑞が六甲山山麓に建設した別邸である。二楽荘における事業で教育とともに評価できるのが園芸で、大谷光瑞は二楽荘園芸部を開設し、荘内に果樹園・温室・庭園などの園芸施設や、牧場などを設置していた(和田, 2014)。彼は二楽荘園芸部主任に赴任する前、帝室新宿植物御苑において、福羽逸人の指導を受け、1910(明治43)年から1911(明治44)年にかけて、すでに二楽荘園芸部主任として従事していた(和田, 2014)。なお、福羽逸人は1911年から1913年にかけて、武庫離宮(現在の須磨離宮公園)庭園を新営し、阪神間に当時のフランス造園手法を用いた最新の造園手法を紹介し、武庫離宮の温室に東京から花卉や果樹を導入したとされ(若泉・鈴木, 2008)、大正初期の阪神間における園芸文化にも大きな影響を与えたと考えられる。

次に、執筆者ではないが、記事等で登場する代表的な人物について解説する。

創刊号の第1巻第1号には、記事「私が園芸を初めて動機(原文ママ)」(郊外生活編集部, 1914a)において、各界の著名人5氏である伊集院兼知(子爵)、北里柴三郎(医学博士)、鈴木克美(法学士)、伊東祐享(元帥)、今村繁三への、郊外生活編集部のインタビュー形式による記事が掲載されている。子爵である伊集院兼知は、帝国議会議員も務め、『蘭科培養の要諦』を1927(昭和2)年に著している。伊集院兼知は、アサガオ(*Ipomoea nil* (L.) Roth)から始まり、ラン科植物を行い、現在はダリア(*Dahlia* cvs.)栽培であり、「園芸を初めた(原文ママ)ために身体が非常に丈夫になった」と述べている(郊外生活編集部, 1914 a)。医学博士の北里柴三郎は、「日本の細菌学の父」と言われる著名な医学者で、職業上の参考としていろいろ

な動植物を遺伝性研究のために集めているとしている(郊外生活編集部, 1914a)。5氏は阪神間に居住してはいないので、著名人が園芸を行っていることを紹介することで園芸のすすめを意図した記事であると考えられる。

また、貿易会社白洲商店を創業した実業家である白洲文平の園芸家としての紹介記事において、阪神電車の青木駅周辺に白洲文平が好きで作ったとされる園芸場「白洲園」があり、尖塔の形をした温室が複数あり、花卉、果樹、野菜が栽培されているとしている(郊外生活編集部, 1914b)。「白洲園」はボタン(*Paeonia suffruticosa* Andrews)が有名で、橋本(1914)は、「白洲園は平常から公開して天下に向かって「阪神園芸」のために気を吐いていた」とし、「青木の牡丹として当沿線(阪神沿線)名所の一つに加えなければならない。」としている。なお、白洲文平は、第二次世界大戦後、吉田 茂首相に請われてGHQとの折衝にあたったことで知られる白洲次郎の父でもある。

以上のように、雑誌『郊外生活』における執筆者や記事の登場人物は当時の著名人で、園を公開している事例もあり、園芸関係記事に関しては園芸分野の第一人者が執筆していたことが明らかになった。

### 3. 観賞植物について

掲載された記事、広告、写真および挿絵数が最も多かった観賞植物はダリア(*Dahlia* cvs.)で、掲載数は45であった(第4表)。ダリアに関しては、1909(明治42)年に帝国園芸協会が芝公園の勤工場内で、日本で初めてダリアの陳列会を開催したが、その内容は貧弱なものであった(清野, 2009)。帝国園芸協会は1910年に日比谷花壇の松本楼で陳列会を再び開催し、翌1911年にはダリア研究会主催による品評会と、国民ダリア会が主催し、国民新聞社が後援する品評会が、ともに充実した内容で赤坂三会堂において開催され、その後、各地で品評会が開催されるようになった(清野, 2009)とされる。

第1巻第5号、第6号の広告および第1号第7号の記事「香櫛園浜に催されたる第二回関西ダリア大会」(郊外生活編集部, 1914c)により、関西園芸協会主催による関西ダリア大会が、1913年(第1回)と翌1914年(第2回)に香櫛園浜(現在の香櫛園浜)で開催され、審査は帝国園芸協会理事の諏訪部國令と、関西園芸協会の会長でもあった菊池幽芳であったことがわかる。第1巻第7号の記事「香櫛園浜に催されたる第二回関西ダリア大会」(郊外生活編集部, 1914c)には、当時の阪神間の代表的企業であるアサヒビールの提灯が写真に見て取れる。

2位はベゴニア類(*Begonia* spp. & hybrids)で、掲載数は40と多く、球根ベゴニア(*B. Tuberhybrida* Group)、クリスマス・ベゴニア(*B. × cheimantha*

Table 4. Number of magazine articles about ornament plants in the Journal 'Kogai-Seikatsu'.  
第4表. 雑誌『郊外生活』における観賞植物の掲載記事数.<sup>2</sup>

鑑賞植物名 <sup>y</sup>	掲載数	鑑賞植物名 <sup>y</sup>	掲載数
ダリア	45	アスター	8
ペゴニア類	40	スノードロップ	8
球根ペゴニア	12	ウメ	7
クリスマス・ペゴニア	11	クロッカス	7
ペゴニア・ソコトラナ	9	ジニア	7
ペゴニア類	8	ナデシコ類 (セキチク含む)	7
スイートピー	33	フロックス	7
キク	29	マーガレット	7
プリムラ類	25	アスパラガス	6
サクラソウ	3	アマリリス	6
プリムラ・オブコニカ	4	カンナ	6
プリムラ・シネンシス	4	キンセンカ	6
プリムラ・マラコイデス	1	グラジオラス	6
プリムラ類	13	クレロデンドロン	6
カーネーション	24	ジャクヤク	6
チューリップ	23	スイートアリッサム	6
ヒアシンス	20	ハイビスカス	6
シネラリア	18	ペチュニア	6
ゼラニウム	18	ポインセチア	6
スイセン (ラッパズイセン含む)	16	ロベリア	6
アサガオ	14	アキメネス	5
アネモネ	14	オキザリス	5
グロキシニア	13	カラジウム	5
バラ	12	キンレンカ	5
カルセオラリア	11	サルビア	5
ポピー(ケン、ヒナゲシ、ハナビシソウ)	11	ジェスネリア	5
ユリ類	11	ストック	5
洋ラン類 <sup>x</sup>	11	デルフィニウム	5
スイレン	10	ニオイスマイレ	5
デージー	10	マリーゴールド	5
パンジー	10	モントブレチア	5
フリージア	10	ルピナス	5
シクラメン	9	ローダンセ	5
テンニンギク	9	ワスレナグサ	5
ボタン	9	その他	254

<sup>2</sup>掲載された記事、広告および写真数。

<sup>y</sup>表記法は原則『園芸学用語集・作物名編』（園芸学会編）に準拠した。

<sup>x</sup>洋ランとして扱われるものを一括して扱った。

Everett), ペゴニア・ソコトラナ (*B. socotrana* Hook. f.), ペゴニア類などと表記されていた (第4表)。なお, 第1巻第2号に掲載された写真「阪神書報」の説明文より, クリスマス・ペゴニアの園芸品種「グロワール・ド・ローレン」('Gloire de Lorraine')が大正園に新設された大温室で栽培されていたことがわかる。この園芸品種は, 1892年に, フランスにおいて世界で最初に育成されたクリスマス・ペゴニア系のペゴニアで, 日本1912(明治45, 大正元)年に導入され(植村, 2003), 日本に導入してすぐに阪神間で栽培されていたことが判明した。

3位はスイートピー (*Lathyrus odoratus* L.) で, 掲載数33であった。1914年4月に当時, 西宮にあった大正園でスイートピー大会が開催されている(尾崎, 1914a)。

以下, 4位キク (*Chrysanthemum* × *morifolium* Ramat.), 5位プリムラ類 (*Primula* spp. & hybrids), 6位カーネーション (*Dianthus caryophyllus* L.), 7位チューリップ (*Tulipa* cvs.), 8位ヒアシンス (*Hyacinthus orientalis* L.), 9位シネラリア (*Pericallis* × *hybrida* (Regel) B. Nord.) およびゼラニウム (*Pelargonium* × *hortorum* L. Bailey) であり(第4表), キク以外はいずれも西洋のイメージを彷彿させるものであった。カーネーションに関しては, 今日のパーペ

チュアル・カーネーションの日本への導入は1909年とされ, 1910年には東京で営利栽培が始まり, 1913年には京都でも営利栽培が始まっている(武田・塚本, 1994)。尾崎哲之助(1914)は雑誌『郊外生活』の第1巻第5, 6, 8, 9号において「カーネーションの事すべて」と題した記事を掲載している(第3表)。そのうち, 初回の第1巻第5号において, 「近来我が国に於ける園芸は, 殊に花卉園芸が長足の進歩をして, ダリヤ(原文ママ), 薔薇, スイートピー, カーネーションの愛培者が年毎に多くなったのは実に嬉しい傾向であります」とし, パーペチュアル・カーネーションの説明をしていることから(尾崎, 1914b), 1914年にはすでに阪神間でカーネーションが生産園芸だけでなく, 家庭園芸の場でも栽培されていたこととなる。特に神戸周辺で洋花が普及したのは, 1912(大正元)年11月に発行された『兵庫県の園芸』(兵庫県農会, 1912)によると明治維新後の神戸港の発展とともに外国貿易が頻繁となり, 外国人の居住が多くなり, 神戸市を中心として富豪紳士の別荘地となって流行したとある。

以上のように, 大正時代初期の阪神間では, 上流階級を中心とした家庭園芸において, 当時珍しかった観賞植物が普及していたと考えられた。

#### 4. 野菜および果樹について

最も掲載数が多い野菜および果樹は、掲載数14のダイコン (*Raphanus sativus* L.) であった (第5表)。上位のものとしては、2位ネギ類 (*Allium* spp.), 3位レタス (*Lactuca sativa* L.), 4位キュウリ (*Cucumis sativus* L.), 5位キャベツ (*Brassica oleracea* L. Capitata Group), ナス (*Solanum melongena* L.) があり (第5表), いずれも野菜で、現代の家庭菜園でもよく栽培されているものであった。ネギ類の内、千住ネギは関東地方を中心に栽培される根深ネギの一群で、1911 (明治44) 年に出版された『最新蔬菜園藝全書』によると、1879 (明治12) 年頃に東京府南足立郡北千住付近 (現在の東京都足立区) において栽培を試みたとあり (喜田, 1911), 大正時代初期には阪神間において栽培されていたことが明らかになった。

施山 (2013) によると、大正時代の料理書に現れる野菜出現率が高いものとして、ダイコン、ニンジン (*Daucus carota* subsp. *sativus* (Hoffm.) Arc.), ナス、タマネギ (*Allium cepa* L.), ネギ (*Allium fistulosum* L.) を挙げており、本研究の結果とほぼ一致している。

メロン (*Cucumis melo* L.) の掲載数は8と多く、第1巻第6号では「マスクメロンの作り方—八百の苗を枯らした苦き経験より」(千原, 1914) と題した記事がある。また、第1巻第8号では「マスクメロン—両断して乳をかけて匙でたべる」(北神, 1914) と題した食し方の記事があり、当時まだ一般的ではなかったことがうかがえる。また、同記事には、阪神付近でメロンを栽培している個人または施設が30挙げられており、前述した白洲文平の名があり「白洲園」でもメロンが栽培されていたことがわかる (北神, 1914)。

西宮市鳴尾地域では、大正時代初期から昭和時代の戦前期まで鳴尾苺としてイチゴ (*Potentilla* × *ananassa* (Rozier) Mabb.) が同地域の名産であり (新

宅ら, 2009), 第1巻第6号では写真「鳴尾の苺畑」が、第2巻第9号には「鳴尾名物草莓の苗は今から」(中安, 1915) と題した記事がある。

果樹についての掲載数は少なく、代表的なものとしては掲載数6のモモ (*Prunus persica* (L.) Batsch) のみであった (第5表)。第1巻第6号の「菊池博士の家庭園芸—主人の園芸とご夫人の養蚕」(銀冠郎, 1914) と題した記事の中では、希少なモモ‘蟠桃’の栽培が記載されている。なお、菊池博士とは、第四師団軍医部長を務め、後に回生病院 (大阪) を設立した菊池常三郎のことと思われ、第1巻第6号に「西の宮に来るまでと来てからと」(菊池, 1914) と題した記事の中で、「此処に来てから自分は果樹を植えてたのしむことにした」と記述している。

以上のように、雑誌『郊外生活』において掲載数が多い野菜および果樹は、当時まだ珍しかった観賞植物とは違って、メロンなど一部を除き、ほとんどが一般的なものであった。

#### 5. 第一次世界大戦が阪神間の園芸文化に及ぼす影響について

『兵庫県の園芸』(兵庫県農会, 1912) の第1章本県園芸業の大勢において、家庭園芸の項目を設け、「殊に家庭園芸経営者の多きこと他に其類を見ざるは本県の誇りとする所なり」とあり、大正元年には家庭園芸を扱う種苗店がすでに多い状況であり、家庭園芸も盛んであったと考えられる。

一方、1914年7月にオーストリアがセルビアに宣戦し、8月にはロシア・フランス・イギリスがセルビア側に、ドイツがオーストリア側にたって参戦し、第一次世界大戦がはじまり、日本も日英同盟を理由として1914年8月、ドイツに宣戦している (五味・鳥海, 2009)。このような世界的な世情は、大正初期の阪神

Table 5. Number of magazine articles about vegetables and fruit trees in the Journal 'Kogai-Seikatsu'.  
第5表. 雑誌『郊外生活』における野菜および果樹の掲載記事数.<sup>2</sup>

野菜・果樹名 <sup>1)</sup>	掲載数	野菜・果樹名	掲載数
ダイコン	14	イチゴ	7
ダイコン	10	イチゴ	5
時無ダイコン	3	鳴尾苺	2
夏ダイコン	1	カリフラワー	7
ネギ類	12	パセリ	7
ネギ	7	ハツカダイコン	7
ワケギ	2	インゲンマメ	6
千住ネギ	1	ゴボウ	6
アサツキ	1	スイカ	6
ネギ類	1	モモ	6
レタス	11	モモ	5
キュウリ	10	モモ‘蟠桃’	1
キャベツ	9	カボチャ	5
ナス	9	キョウナ	5
エンドウ	8	サトイモ	5
トマト	8	セロリ	5
ニンジン	8	ホウレンソウ	5
メロン	8	ミツバ	5
メロン	4	その他	91
マスクメロン	4		

<sup>2</sup>掲載された記事、広告および写真数。

<sup>1)</sup>表記法は原則『園芸学用語集・作物名編』(園芸学会編)に準拠した。

間の園芸文化にも影響を与えたことが考えられる。

前述のように、第1巻第1～12号と第2巻第1～11号(第8号休刊)の2群にわけ、園芸に関する記事、広告、写真および挿絵数の合計数および園芸頁率について検討した結果、いずれも第2巻第1～11号において、1%水準で有意に減少することが認められた。

また、第一次世界大戦によりヨーロッパからの輸入にも影響があり、1914年7月には染料・医薬品の輸入が途絶え、このために衛生試験所が製薬部を設けて製薬指導に乗り出し(下川, 2000)、同年10月にはドイツから輸入していた硫酸ニコチンが途絶え、鳥取県ではモモなどの栽培が不可能になる(梶浦, 2008)との報告がある。第2巻第1号において、郊外生活編集部により別記事の最後の余白に、タイトルがない記事として「欧羅巴の大騒ぎで一切の輸入が途絶して居ましたが、昨年の十二月になって東明の錦華園に和蘭の球根類が入りました」とあり、秋に輸入されるべき球根類が他の輸入品と同様に輸入が途絶え、1914年12月にはオランダ産の球根類が輸入されたことがわかる。

1914年8月30日には、ドイツの飛行機がパリに爆弾を投下し、世界初の空襲が行われた(下川, 2000)。第1巻第9号には、これまで掲載された記事とは異質の記事『空中戦争に於ける機械と人と』(短剣, 1914)において、「独逸の飛行機が仏蘭西の都に爆弾を落して、小癩にも巴里の人心を脅した」と記述とするとともに、日本の空中戦闘力を分析している。雑誌『郊外生活』において、戦争に関わる記事はこれのみである。目次のタイトルには『世界中の飛行機と人と』とあり、混乱の中での掲載であったことがうかがえる。

浅井友太郎はガス鉄管輸入商で、阪神電鉄魚崎停留所付近に広大な邸宅を構えていた(竹村, 2004)。第2巻第1号において、郊外生活編集部の浅井友太郎夫人へのインタビュー記事「主人と主婦-家庭訪問, 一」(郊外生活編集部, 1915a)の中で、「その広い庭で秋毎に子供の園遊会が催されて、小さなお客様が三百人近くも招かれ」て例年行われた園遊会が、「その園遊会も昨年の秋は已むを得ず見合わせとなった。欧羅巴の国々が敵味方に分かれて戦争の最中だから、その国々の少年を一つ処に集める事は如何であろうかと云う事で、まづ平和の復するまでは賑やかな集まりを見ることが出来なくなった」と記載されている。この記事から、ヨーロッパ出身の子どもたちも含めて秋毎に300名の子どもたちを招いていたが、第一次世界大戦の勃発による世情を考慮し、1914年秋は開催を中止したことになる。

第2巻第6号には、囲み記事として「By hospitality a beauty garden placed at anyone's disposal」(郊外生活編集部, 1915b)と題した英文記事があり、浅井夫妻は庭で休息することを望む海外の

女性、紳士、子どもたちを歓迎しているとし、1915年6月には平常に戻ったことが推測される。

表紙のデザインについては、第1巻第1～12号は「郊外生活」と表記した上に英語表記書名として「The Country Life」と記載してあったが、第2巻第1号からは「The Country Life」の表記がなくなっており、当時の世情を反映したものと考えられる。

人類史上初めての世界大戦である第一次世界大戦は、主戦場がヨーロッパではあったが、ヨーロッパからの輸入が途絶え、園芸関係においても1914年秋にオランダから輸入される球根類が、同年12月まで到着が遅れた。雑誌『郊外生活』の記事に内容にも変化が認められ、第1巻(1914)から第2巻(1915)にかけて、園芸関係の記事等を扱うことが少なくなった。また、第一次世界大戦の影響をうかがえる記事があり、表紙の雑誌名の表記法にも変化が認められた。

## 摘要

阪神間の大正初期における園芸文化を明らかにする目的で、阪神電鉄株式会社が発行した雑誌『郊外生活』第1巻第1号から第2巻第10号(1914～15年発行)の、主として園芸を扱う記事を分析した。園芸に関する記事、広告、写真および挿絵数の頁率および合計数が、いずれも第1巻第1～12号に比較して第2巻第1～11号において有意に( $p < .01$ )減少することが認められた。執筆者や記事の登場人物は当時の著名人で、園芸関係記事に関しては園芸分野の第一人者が執筆していたことが明らかになった。大正初期の阪神間では、上流階級を中心とした家庭園芸において、当時珍しかった観賞植物が普及していたと考えられた。一方、野菜および果樹は一般的なものであった。また、大正初期の阪神間において、第一次世界大戦による園芸文化への影響が認められた。

## 引用文献

- 青木宏一郎. 1998. 江戸の園芸-自然と行楽文化. 筑摩書房. 東京.
- 青木宏一郎. 1999. 江戸のガーデニング. 平凡社. 東京.
- 千原 清. 1914. マスクメロンの作り方-八百の苗を枯らした苦き経験より. 郊外生活 1(6):41-43.
- 永藤清子. 2007. 阪神電気電車の発達と阪神地域における郊外生活の形成. 甲子園短期大学紀要 26:13-20.
- 園芸学会編. 2005. 園芸学用語集・作物名編. 養賢堂. 東京.
- フォーチュン, R. (三宅 肇訳). 1969. 江戸と北京. pp.91-101. 廣川書店. 東京.
- 銀冠郎. 1914. 菊池博士の家庭園芸-主人の園芸とご

- 夫人の養蚕. 郊外生活 1 (6):6-10.
- 五味文彦・鳥海 靖. 2009. もういちど読む山川日本史. 山川出版社. 東京.
- 橋本蘆舟. 1914. 牡丹の事すべて. 郊外生活 1 (5):26-30.
- 平野 恵. 2006. 十九世紀日本の園芸文化—江戸と東京. 植木屋の周辺. 思文閣出版. 京都.
- 兵庫県農会. 1912. 兵庫県の園芸. 兵庫県農会. 神戸.
- 今西林三郎. 1914. 郊外生活の巻頭に. 郊外生活 1 (1):2-3.
- 岩佐亮二. 1985. 特異な展開をした江戸時代の園芸. pp.88-92. 塚本洋太郎 (監修). 朝日園芸百科 20. 朝日新聞社. 東京.
- 梶浦一郎. 2008. 日本果物史年表. 養賢堂. 東京.
- 喜田茂一郎. 1911. 最新蔬菜園藝全書. 秀英舎. 東京.
- 菊池常三郎. 1914. 西の宮に来るまでと来てからと. 郊外生活 1 (6):2-5.
- 菊池幽芳. 1914. 私自身の園藝. 郊外生活 1 (1):4-8.
- 北神 貢. 1914. マスクメロン—両断して乳をかけて匙でたべる. 郊外生活 1 (8):47-48.
- 郊外生活編集部. 1914a. 私が園芸を初めて動機. 郊外生活 1 (1):27.
- 郊外生活編集部. 1914b. 白洲文平氏の野菜園. 郊外生活 1 (3):24.
- 郊外生活編集部. 1914c. 香櫛園浜で催されたる第二回ダリア大会. 郊外生活 1 (7):8-11.
- 郊外生活編集部. 1915a. 主人と主婦—家庭訪問. 一. 郊外生活 2 (1):22-24.
- 郊外生活編集部. 1915b. By hospitality a beauty garden placed at anyone's disposal. 郊外生活 2 (6):22.
- Mabberley, D. J. 2008. Mabberley's plant-book (Third ed.). Cambridge University Press, New York.
- 中西健一. 1979. 日本私有鉄道史研究 (増補版). ミネルヴァ書房. 京都.
- 中尾佐助. 1986. 花と木の文化史. 岩波書店. 東京.
- 中安磯次. 1915. 鳴尾名物 草莓の苗は今から. 郊外生活 2 (9):26-28.
- 小笠原 亮. 1999. 江戸の園芸・平成のガーデニング. 小学館. 東京.
- 小笠原左衛門尉亮軒. 2008. 江戸の花競べ—園芸文化の到来. 青幼舎. 京都.
- 大場秀章. 1997. 江戸の植物学. 東京大学出版会. 東京.
- 大場秀章 (編). 2009. 植物分類表. アボック社. 鎌倉.
- 尾崎哲之助. 1914a. スイートピーの時代—春四月に大会を開く. 郊外生活 1 (3):12-17.
- 尾崎哲之助. 1914b. カーネーションの事すべて. 郊外生活 1 (5):40-42.
- 尾崎哲之助. 1915a. 桑博の庭園. 郊外生活 2 (9):22-25.
- 尾崎哲之助. 1915b. 布哇に於ける園芸. 郊外生活 2 (10):20-21.
- 尾崎哲之助. 1974. 大輪アサガオ. 日本放送出版協会. 東京.
- 清野典子. 2009. 明治・大正・昭和のダリア. pp.124-125. 日本ダリア会 (編). ダリア百科. 誠文堂新光社. 東京.
- 施山紀男. 2013. 食生活の中の野菜. 養賢堂. 東京.
- 下川歌史. 2000. 明治・大正家庭史年表. 河出書房新社. 東京.
- 新宅賀洋・原田理恵・永藤清子. 2009. 大正期から昭和初期における鳴尾イチゴの変遷. 日本家政学会誌 60:401-407.
- 社団法人園芸文化協会. 2015.1.19 (調べた日付). 園芸文化賞・園芸文化特別賞・小松崎園芸文化賞. <http://www.engeibunka.or.jp/jushou01.html>
- シュリーマン, H. (石井和子訳). 1998. シュリーマン旅行記 清国・日本. pp.71-99. 講談社. 東京.
- 正司健一. 1996. 大手私鉄グループの事業戦略と駅. 国民経済雑誌 173(2):23-43.
- 短釘散史. 1914. 空中戦争に於ける機械と人と. 郊外生活 1 (9):36-37.
- 武田恭明・塚本洋太郎. 1994. カーネーション. pp.483-492. 塚本洋太郎 (監). 園芸植物大事典 1 (コンパクト版). 小学館. 東京.
- 竹村民郎. 2004. 大正文化 帝国のユートピア. 三元社. 東京.
- 戸田清子. 2009. 阪神間モダニズムの形成と地域文化の創造. 地域創造学研究 19(4):49-77.
- 土橋 豊. 2013. 暮らしの彩りとしての園芸文化. 農業および園芸 8:43-50.
- 塚本洋太郎. 1978. 園芸の時代. 日本放送出版協会. 東京.
- 塚本洋太郎. 1991. 日本の本草書と園芸書. 日本研究 4:245-267.
- 植村猶行. 2003. 冬咲きベゴニア. pp.242-243. 日本ベゴニア会 (編). ベゴニア百科. 誠文堂新光社. 東京.
- 和田秀寿. 2014. 二楽荘における事業. pp.161-196. 和田秀寿 (編). 二楽荘史談. 国書刊行会. 東京.
- 若泉 悠・鈴木 誠. 2008. 福羽逸人が園芸・造園界に与えた影響. ランドスケープ研究 71:469-474.